

すりかみがわダムにしずんだいせき

摺上川ダムに沈んだ遺跡

■所在地……福島市飯坂町茂庭

■時代……縄文時代・平安時代・中世

■調査年……平成3～15年

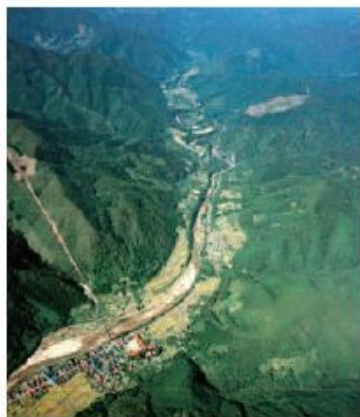
詳しくは

ふくしまの歴史1 原始・古代
P 52～59に掲載

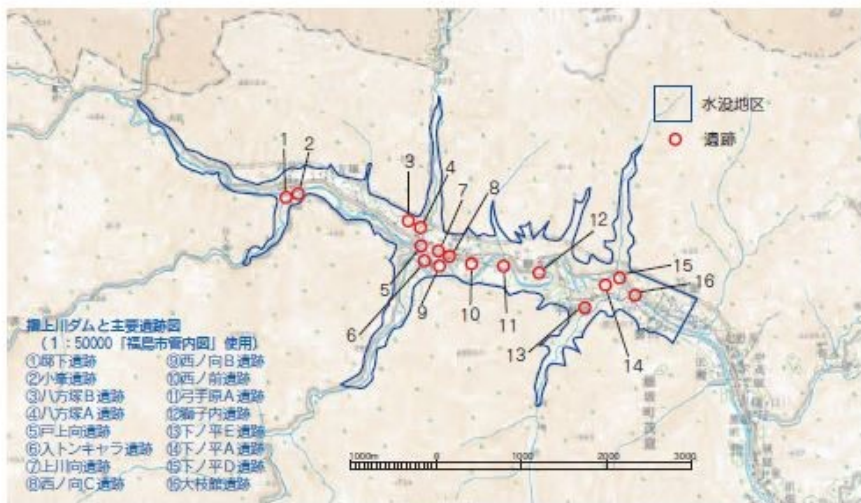


すりかみがわ
摺上川ダムは福島市の北のはずれにある飯坂町茂庭に建設された多目的ダムです。

ダムの建設にともなう行われた、水没する範囲の発掘調査は13年間にもおよび、およそ27ヘクタールの遺跡が調査されました。遺跡の多くは縄文時代のむらの跡で、特に縄文時代の前期の初め頃と中期の終わり頃にたくさんの方が住んでいたことがわかりました。ここではその遺跡の中から、茂庭地区を代表する遺跡についていくつか紹介します。



▲空から見た茂庭地区
山あいにある茂庭地区では、摺上川の両岸に広がる狭い平地が主な生活の場でした。



獅子内遺跡

■時代……縄文時代（前期～後期）

獅子内遺跡は、摺上川が大きくカーブするところにある、とても広い遺跡です。縄文時代前期には茂庭地区で最大のむらがつくられていました。段丘の縁などに長さ4 m、幅3 mほどの長方形の竪穴住居が何軒かまとまってつくられ、大きさや形が似ていることから、むらの人々の結びつきがとても強かったと考えられます。

また、獅子内遺跡から摺上川を下った場所にある下ノ平D遺跡や、川をのぼった場所にある西ノ前遺跡・上川向遺跡・西ノ向D遺跡でも、同じ頃のむらの跡がみつかり、約6,000年前頃、茂庭地区にはたくさんの方が住んでいたことがわかりました。



▲獅子内遺跡でみつかった縄文人のむら
四角にくぼんだ形がすべて竪穴住居。全部で100軒を超える竪穴住居が見つかりました。(福島県文化財センター 白河館(まほろん) 提供)



▲6,000年前の竪穴住居の跡
地面を四角に掘りこんで、中央に柱を立てただけの住居。炬はなく簡単な作りです。長さ約4 m。



▲下ノ平D遺跡
下ノ平D遺跡は獅子内遺跡よりも小さいむらです。時代的にも獅子内遺跡よりも少し後にできたむらなので、獅子内遺跡から分かれたむらかもしれません。

■時代……縄文時代(前期)

下ノ平E遺跡は、摺上川からはなれた小高い丘の斜面にあります。発掘調査では、縄文時代の前期に掘られた、けものをつかまえるための落とし穴が400個ほどみつかっています。落とし穴は、丘の頂上からふもとまで、びっしりと重なり合った状態でみつかっており、同じところに何度もくり返し掘られたことがわかります。また中には一列に並んでいる落とし穴もあります。

落とし穴の形は長方形をはじめ、非常に長い長方形のもの、溝のように細いもの、円形のものなどがあり、深さも1mから2mを超えるものまでさまざまです。ここでは、縄文人にとって、狩りをするのにとてもよい場所だったので、長い間使われ続けたものと思われます。

また、西ノ向D遺跡でも落とし穴が100個ほどみつかっています。



▲下ノ平E遺跡全景
山の傾斜面にたくさんの落とし穴が掘られています。黒く見える穴はすべて落とし穴で、たくさんの落とし穴が重なり合っている様子がよく分かります。



▲縄文時代の落とし穴に落ちたタヌキ
調査中に掘り上げた落とし穴の中にタヌキが落ちました。穴から出られなくなったタヌキは穴のすみのほうにうずくまっていました。



▲みつかった落とし穴
深さは1メートル以上で、大人の人でもいちど中に入ると、なかなか外に出てこられません。動物を罠につかまえるために底に杭を立てていたあとがあります。

■時代……縄文時代中期～後期・平安時代

弓手原A遺跡は、摺上川の右岸にある遺跡で、縄文時代中期から後期にかけてのむらが見つかっています。むらは広く平らな場所ではなく、摺上川の岸辺付近につくられていました。とくに縄文時代の後期のなかば頃には、このあたりにいちばん大きなむらがあったようです。



▲空から見た弓手原A遺跡
写真の右側に見えるのが摺上川です。川よりの部分にむらがつくられていました。(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉提供)



▲縄文時代後期の竪穴住居の跡
直径3.5mの円形の住居で、中央には石で囲った炬がつけられています。手前の穴が二つならんでいるところが入口です。(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉提供)

また、茂庭地区では数少ない平安時代のむらの跡も見つかっています。むらは6軒からなる小さなものですが、付近からは平安時代のもと考えられる作りかけの木の**お椀**なども見つかっています。平安時代には木製の**椀**や**皿**を作る木工などの職人が住むむらだったようです。



▲弓手原A遺跡でみつかった木の器
弓手原A遺跡では、平安時代に木製の椀や皿が作られていました。発掘調査では、ロクロで挽く前の、荒く形を整えた未完成の品が発見されています。(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉蔵)

邸下遺跡

■時代……縄文時代中期～晩期

邸下遺跡は、茂庭地区でも一番上流でみつかった遺跡で、それより上流では今のところ遺跡はみつかっていません。それほど広くない土地に縄文時代中期から晩期まで



▲邸下遺跡でみつかった11号竪穴住居跡
直径7mほどの円形の住居跡で、深さは70cm以上ありました。石を列べて作った炉の直径は1m50cmほどです。



▲邸下遺跡でみつかった敷石住居跡
住居の床に平らな石を敷き詰めた住居跡です。関東地方で広く取り入れられた住居の形で、福島では縄文時代後期のはじめ頃にみられます。

小さなむらが連続して営まれていることが特徴です。中期の複式炉を持つ竪穴住居や後期の敷石住居もみつっていますが、縄文時代後期の終わり頃につくられた11号竪穴住居は直径が7mもあり、茂庭地区で最大の大きさです。

また、遺跡のなかに100個を超える穴が密集して掘り込まれていました。穴は直径が1mほどで、石や土器と一緒にわざと埋められていました。これらの穴は落とし穴と違って何のために掘られたものかはわかりませんが、むらが営まれていた間、ずっと掘り続けられていたようです。



▲邸下遺跡でみつかった穴
直径1mほどの大きさですが、中にはたくさんの石が入られていました。

小屋館跡

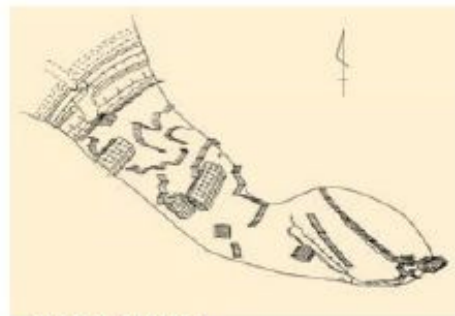
■時代……中世

茂庭地区では大枝館跡と小屋館跡の2ヵ所の館跡を調査しました。どちらも三方を急な崖に囲まれた高台の上であり、茂庭に居を定めた伊達家の家臣である茂庭氏の居城と伝えられていますが、大枝館跡では建物の跡などはみつかりませんでした。

小屋館跡は土塁と堀で区切られた細長い敷地から、門の跡や6棟の建物跡などがみついています。その反面、生活の様子を表す日常的な道具などはみつかっていないため、伊達氏が親子で争い、福島市付近にも動乱のおよんだ「天文の乱」の時期に軍事目的で作られた館跡である可能性が考えられます。



▲小屋館跡
川から50mほどの高さでそそり立つ断崖の上にあります。三方が断崖で、入り口には土塁・空堀があるので、堅固な守りを意識していると考えられます。
(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉提供)



▲小屋館跡建物推定図
発掘調査で見えられた建物跡から、小屋館の建物跡の配置を推定。(『旧上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』より)
(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉提供)